

## 知訥の元暁観

尹 鮮 昊

### 一 はじめに

朝鮮高麗時代の禪僧である知訥(一一五八―一二二〇)は、約十部の著書を遺した。その著書内には少数ではあるが、新羅の元暁(六一七―六八六)の著作を引用した箇所を確認できる。知訥の伝記資料である「昇平府曹溪山修禪社(松広寺)仏日普照国師碑銘并序」には、元暁に関する事柄が記されていないため、知訥の元暁観を知るためには著書内に引用された文を考察する他に方法は無い。本稿では、知訥の初期の著書とされる『勸修定慧結社文』に引用された文を示し、どのように知訥が元暁の文を利用していたのかを考えたい。結論から述べれば、福土慈愍氏は「元暁の著述は第二次及び三次資料として用いているに過ぎず、また引用例からも元暁を重用していることは窺えない」と指摘しているが、そのように重用していないと言いつけることはできないのではないかと思われる、少なくとも実践的な修行に関して言及する際には元暁

の著作を重視していたと考えられる。

### 二 知訥の著書の一特徴

元暁の引用文を考察する前に、知訥の著書の特徴を挙げておく。それは他文献からの引用文の典拠を示さず、「曰」や「云」といった語を省き、自身の言葉として使用している点である。例えば、『勸修定慧結社文』「当是時也、愛惡自然淡薄、悲智自然増明、罪業自然断除、功行自然精進。煩惱尽時、生死即絶、生滅滅已、寂照現前、応用無窮、度有縁衆生」(韓仏全四・六九九中)は、『裴休拾遺問』(新纂統藏六三・三四上)。「禅源諸詮集都序」にも類似した文あり)からの引用文であり、『誠初心学人文』(韓仏全四・七三八上)には、長蘆宗頤(生没年不詳)『禅苑清規』(新纂統藏六三・五二三中、五四八下―五四九上)から引用したと思われる箇所がある。また著しい例は以下の文である。

『華嚴論節要』序文

大定乙巳秋月、余始隱居下柯山、…退帰山中、坐閱大藏。求仏語之契心宗者、凡三周寒暑。至閱華嚴經出現品、一塵含大千經卷之喻、後合云、如來智慧亦復如是、具足在於衆生身中、但諸凡愚不知不覺。予頂戴經卷、不覺殞涕。（韓仏全四・七六七下）

宗密（七八〇—八四一）『円覚經大疏鈔』卷一

即華嚴出現品云、仏子無一衆生而不具有如來智慧。…一切智自然智無礙智則得現前。便拳一塵含大千經卷之喻、後合云、如來智慧亦復如是、具足在於衆生身中、但諸凡愚不知不覺。

（新纂統藏九・四七〇中一下）

一見して分かるように、知訥が『八〇華嚴』・「如來出現品」を読むに至るといふ序文の一文は、宗密の『円覚經大疏鈔』に記される文とほぼ合致しているのである。つまり序文で語られた、知訥が『華嚴經』を目にして涙したという逸話は、宗密の著書に基づいているとも考えられるのである。なぜこのような一致が見られるかに関しては、今後詳細に検討すべき課題であろう。

### 三 『勸修定慧結社文』に引用された元暁の著作

『勸修定慧結社文』には七つの問答が記されており、その中で元暁の引用文が確認できたのは、一つ目と二つ目の問答においてである。<sup>2)</sup> まずは知訥の著書の特徴を踏まえて、一つ

知訥の元暁観（尹）

目の問答に引用された元暁の著作について考察する。

一つ目の或る諸公による問いは、韓普光氏が指摘しているとおり、知訥が定慧の修行を勧めたところ、大衆は末法時代において浄土の業を行う方が良いという反論を提起したものである。<sup>3)</sup> それに対して知訥は、時が遷り変わったとしても心性は移らず、法道の興衰を見ることは三乗権学の誤った見解であり、智者はそのような見解を持たないため、正像末の考えを起こしてはならないことを説き、また勤念は特別に行う法ではなく、日常的に行われる法であることを主張する。法道の興衰については李通玄（七、八世紀頃）『新華嚴經論』の説を用いて、像法や末法を説かないことが了義經であると説明する。<sup>4)</sup> 続けて『新華嚴經論』を引き、智人に習って如來の出興や滅没に捉われないことなく、定慧の二門に従い理を明らかにするべきことを説く。<sup>5)</sup> その後の文に元暁の著作を引く。

先聖教旨如斯。豈敢造次輒有浪陳。誓遵了義懇苦之言、不依權学方便之説。我輩沙門雖生末法、稟性頑癡、若自退屈着相求道、則從前学得定慧妙門。更是何人所行之事。行之難故、捨而不修、則今不習故、雖經多劫、弥在其難。若今強修難修之行、因修習力故、漸得不難。古之為道者、還有不從凡夫來者耶。諸經論中、還有不許末世衆生修無漏道乎。

（韓仏全四・六九八下）

元暁『菩薩戒本持犯要記』

問、戒相如是、甚深難解。…答、經中正答如汝問、…此答意者、若

使彼行、由未曾修、難可行故。今不修者、今不習故、後亦不修。如是久久、弥在其難。故令從初習其難、習行漸增、転成其易。是謂新行発趣大意。究竟持犯、略明如是。

（大正四五・九二一中）

知訥は李通玄の教旨である了義の言を遵守し、誤った仮の方便に依らず、たとえ末法時だからと言つて修行に専念せずに過ごせば、定慧の妙門を得ることはできないとする。しかし定慧の妙門を会得する困難さを、おそらく当時の修行者、また知訥自身も承知していたため、求道を諦めさせないために、さらに修行者を鼓舞する必要性を感じて、『菩薩戒本持犯要記』の文を引用したと推測する。この箇所引用文は、知訥の一特徴と考えられる自身の言葉として使用した例であろう。『修心訣』にも類似の文があるため、知訥が重んじて使用していたことが窺える。ちなみに『菩薩戒本持犯要記』以外に「弥在其難」の文を用いた例は、知訥以前の經典、論疏類中には見られないため、知訥が他の書物から引いた、もしくは孫引きして用いた可能性は低いと思われる。

二つ目の元曉引用文は、修禪者はなぜ「神通智慧」「通力」を發揮していないのかと問うた質問者に対して、知訥が神通の道力を求める前に先ずは智者の行法である「自心返照」「信解真正」を習うべきであると答えた問答内に見られる。知訥は智者の例を禪・教両宗の立場から説明するため、禪宗は

『景德伝燈録』の仰山慧寂（九世紀頃）章と宗密章から文を引き、教宗は元曉の文を引くに至る。

且如元曉法師云、如諸世間愚夫觀行、内計有心、外求諸理、求理弥細、転取外相。故還背理去遠、若天与地。所以終退没、受無窮生死。智者觀行、与此相反、外忘諸理、内求自心。求心至極、忘理都尽、尽忘所取、取心都滅。所以能得至無理之至理、畢竟無退、還住無住涅槃。又復小聖計心、先有生性、故過微心（小聖以漸細漸微微三方便得入）、得心滅無、無智無照、不異空界。大士解心本無生性、故離細想、不得滅無、真照智在証会法界。（韓仏全四・七〇〇上）

以上の元曉の引用文は典拠不明であり、先行研究でも引用文であることを指摘しているだけで典拠を明かしていない。<sup>9)</sup> 典拠を確認できないため、どこまでが引用文であるかも不明。「愚夫」と「智者」、「小聖」と「大士」を対にして説明しているところから、以上に示した箇所全体が引用文であると憶測する。なお「智人」に関して説いた部分は『看話決疑論』（韓仏全四・七三七上）にも同文が引かれているため、引用文である可能性が高い。現存の元曉著書と関連しているのは、「無理之至理」という語句が『大乘起信論別記』（大正四四・二二六上）と『金剛三昧経論』（大正三四・九六一上）に記載される語句であり、そして「愚夫觀行」の語は、元曉が『四卷楞伽』と『十卷楞伽』に依るところが多いという点を踏まえれば、『楞伽経』を参考にした語であると想定できよう。<sup>10)</sup> また

「…故過微心」の割注で用いられた「漸細漸微微微」の語句は、おそらく玄奘（六〇二—六六四）訳『成唯識論』卷一（大正三一・五下）の語句を参考にしている。元暁は『大乘起信論別記』（大正四四・二三一上）において『成唯識論』を「新論」と称して引用していることから、割注部分は元暁が『成唯識論』を基にして記したと考えることもできる。ただ割注が元から引用箇所にあったのかは不明である。

#### 四 おわりに

知訥は元暁の修行観を尊重していたと思われる。今後知訥の著書を読解する際には、他にも典拠を示さずに自身の言葉として使用している引用文がある可能性を考慮していきたい。

- 1 福士「二〇〇四」、二八〇頁。
  - 2 『勸修定慧結社文』の構成については韓「一九九九」、二〇一—二一頁に詳しい。
  - 3 韓仏全四・六九八中。韓「九九九」、二二頁。
  - 4 韓仏全四・六九八中—下。この部分の引用元を『新華嚴經論』から採し得なかった。
  - 5 韓仏全四・六九八下。『新華嚴經論』卷三一（大正三六・九三七上）。
  - 6 韓仏全四・七一四上。尹「二〇一八」、九九一—一〇〇頁。
  - 7 英心（十四世紀頃）『菩薩戒問答洞義抄』（大正七四・九七中）に同箇所引用文あり。
  - 8 韓仏全四・六九九下—七〇〇上。
  - 9 『普照全書』「一九八九」、一一—一二頁。
- 福士「二〇〇四」、二七八頁。Buswell「二〇一七」、一三一頁。

知訥の元暁観（尹）

- 10 石井「一九九六」、二〇三—二〇四頁。  
「二〇〇三」、三三三頁。
- 11 吉津

〈一次資料〉

- 韓仏全「東国大学校韓国仏教全書編纂委員会『韓国仏教全書』四、東国大学校出版部、一九八二

〈参考文献〉

- 普照思想研究院編『普照全書』仏日出版社、一九八九  
石井公成『華嚴思想の研究』春秋社、一九九六  
韓普光「知訥の『定慧結社文』における浄土観」『印度学仏教学研究』第四七卷第二号、一九九九  
吉津宜英「元暁の起信論疏と別記との関係について」『韓国仏教学 SEMINAR』第九号、二〇〇二  
福士慈稔『新羅元暁研究』大東出版社、二〇〇四  
Buswell, Robert E., trans. 2012. *Chinul: Selected Works*. Collected Works of Korean Buddhism, vol. 2. Seoul: Compilation Committee of Korean Buddhist Thought.  
尹鮮昊「高麗本『六祖壇經』の一考察——知訥の著書・跋文を参考として——」『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』第五一号、二〇一八

〈キーワード〉 知訥、元暁、『勸修定慧結社文』

（駒澤大学大学院）